

植民地台湾における「邦楽」の広がり

- 三曲・長唄・検番を事例として -

福田 千絵(お茶の水女子大学)

小塩 さとみ(宮城教育大学)

劉 麟玉(奈良教育大学)

本発表は、植民地台湾(1895-1945)において、邦楽の活動がどのように広がっていったのかを、三曲、長唄という2つのジャンルと、検番という場を焦点を当て、当時の新聞、雑誌等から抽出したデータに基づいて明らかにするものである。今回の発表は、劉麟玉代表による科研費研究の成果の一部である。科研費研究では、植民地台湾で行われた日本の伝統音楽について幅広く調査しているが、今回の発表では、対象を絞り、具体的な事例を紹介しながら考察を行いたい。

冒頭で今回の発表の枠組みを提示した後、福田が三曲(箏曲・尺八楽)を対象に報告を行う。台湾の邦楽雑誌『台湾邦楽界』を中心に、植民地台湾における三曲の各流派の動向を検討する。在台邦楽家の活動は、基本的には内地と軌を一にしていた一方で、当然ながら独自の特色も持っていた。本発表では、主に1920年代から30年代にかけての各流派の個別の動向、協会・連盟等の設立、各流派合同の演奏会等を取り上げ、内地の邦楽雑誌『三曲』と比較しながら、植民地における邦楽の活動の特色について考察する。

続いて、小塩が台北で発行されていた日刊紙『台湾日日新聞』から読み取れる長唄の活動を中心に報告する。新聞に記載された情報は断片的ではあるが、1890年代末から1940年代初頭まで、長期間にわたる活動を読み取ることができる。必要に応じて、他の月刊誌等から得られた情報も参照しながら、植民地台湾における長唄の活動の広がりを概観したい。

最後に、劉が台北で設立された検番に焦点を当て、植民地台湾で刊行された雑誌記事を通して検番の組織や活動内容を概観する。また、それらの活動のうち、台湾神社祭の余興に関わっている様子を『台湾日日新聞』の記事から明らかにし、台北の検番がいつから、どのように台湾神社祭の余興に参加したのか、明治期から昭和期までの状況を考察する。